

研究・調査報告書

報告書番号	担当
390	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Drinking patterns, dependency and life-time drinking history in alcohol-related liver disease. アルコール関連肝疾患における、飲酒パターン、依存性、および生涯飲酒歴	
執筆者	
Hatton J, Burton A, Nash H, Munn E, Burgoyne L, Sheron N.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Addiction. 2009 Apr;104(4):587-92. Epub 2008 Jan 11.	
キーワード	
アルコール、一時的多量飲酒、肝硬へん、飲酒パターン、飲酒歷程、肝臓病	
要 旨	
目的： 英国における肝臓疾患死亡増加の要因は、習慣的有害飲酒によるものではなく、一時的多量飲酒によるものである、という仮説を検証すること。	
方法： 英国南部教育病院の肝疾患病棟において入院ないし外来患者を対象とした前向き調査を実施した。2007年10月から2008年3月の入院・外来患者234人を対象とした。調査は対面調査にて飲酒関連障害同定テスト、七日間の飲酒日誌、アルコール依存性重症度評価質問票、生涯飲酒歴、および肝臓アセスメントを実施した。	
結果： 234人の対象者中、106人においてアルコールが肝疾患の主病因(アルコール性肝疾患ALD)であり、その中の80人は肝硬変または進行性線維化を来たしていた。このうち、57人(71%)は毎日飲酒しており、10人(13%)のみが、週当たり4日未満の飲酒であった。さらにこのうち、5人は最近禁酒しており、また4人は減酒していた。ALD患者において、二つの飲酒パターンが82%を占めていた: 若いころからの酒量増加(51%)、および変化の多い飲酒パターン(31%)。ALD患者は、20歳から現在に至るまでの間で、有意に飲酒日、および一日当たりの飲酒量が非ALD患者に比べて多かった。	
結論： 英国における肝疾患死亡増加は、毎日あるいはそれに近い多量飲酒によるものであり、一時的多量飲酒によるものではなかった。またこうした習慣的飲酒パターンは若い年代においてもよく見られた。	